

き む ら ぶ ざ ん
木村武山

びつが きわ
仏画を極めた日本画家 笠間市・北茨城市



(木村明正氏提供)

明治9年(1876) - 昭和17年(1942)。笠間生まれ。本名は信太郎。幼少時、同町石井在住の南画家桜井華陵に絵を学ぶ。明治24年(1891)、東京美術学校〔東京芸術大学〕入学、岡倉天心、橋本雅邦らに日本画を学ぶ。明治31年(1898)、近衛歩兵第一連隊入隊。同33年(1900)、日本美術院正員に推挙される。同37年(1904)には日露戦争に召集され、陸軍中尉となる。明治39年(1906)~大正元年(1912)、美術院のメンバーとともに、茨城県五浦海岸で制作に打ち込む。昭和12年(1937)、脳出血で倒れるが、「左武山」として復活、仏画と花鳥画の名品を数多く残す。

木村武山は、岡倉天心 (P.7 参照) のもと日本美術院の中心メンバーの一人として活躍した日本画家で、明治9年(1876)に笠間で生まれました。

武山は幼いころから絵の才能を示し、父は3歳から絵を習わせます。武山が絵の道に進むことができたのは、父の深い愛情と、暮らしの豊かさがあったからだといわれています。

明治23年(1890)、小学校を卒業した武山は、東京の開成中学校に進学し、中学の2年を終えたときに、東京美術学校〔東京芸術大学〕の日本画科に入学しました。校長の岡倉天心をはじめ、多くの先生たちからきびしい指導を受け、大きく成長しました。

明治30年(1897)、平泉の中尊寺金色堂の修復作業が国から東京美術学校にまかされると、武山は助手として参加し、仏像や仏具などの名宝に接する機会を得ました。この経験により、後に「仏画の武山」と称されるほど、仏画にひかれていくことになります。

明治31年(1898)、岡倉天心が校長の職を追放されるという事件が起こりました。天心は、自分を慕って東京美術学校をやめた横山大観 (P.85 参照) らと、東京の谷中に日本美術院を創設するとともに展覧会を開いたりして若手の育成に努めました。東京美術学校卒業後、日本画の技術を磨いていた武山は、この展覧会に出品して評価されます。

明治39年(1906)、美術院が五浦〔北茨城市大津町五浦〕に移転することになると、武山も横山大観、下村観山、菱田春草とともに、一家をあげて五浦に移り住みました。しかし、当時の五浦は不便で、経済的にも苦しく、4人とその家族は苦勞の連続だったといわれています。ここで、武山は彼の代表作ともいえる「阿房劫火」を描き上げ、



「阿房劫火」(茨城県近代美術館蔵)

明治 40 年 (1907) の第 1 回文部省美術展覧会 (文展) に出品して 3 等賞となりました。

天心の没後、武山は東京の谷中天王寺町〔東京都台東区〕を本拠地とし、精力的に制作活動が続けながら、後進の指導に努め、多くの弟子を育てました。武山は面倒みのよい人で、弟子が集まる日には、神戸から牛肉を取り寄せ、牛鍋会を開いたりしたそうです。当時、武山の絵の人気はたいへんなもので、引きも切らず注文がきて、絵を描かなかったのは食事をしているときだけ、夜中の二時、三時まで描き続けていたといわれています。また、笠間の実家にも画室を持ち、ここでも制作や指導を行っており、笠間を中心とする美術の発展に大きな功績をあげています。

ところが、順調に画家としての名声を高めていた武山に、人生最大の試練が訪れます。昭和 12 年 (1937) 2 月、突然脳出血で倒れたのです。幸いにして命に別状はありませんでしたが、画家の生命ともいえるべき、利き手である右手の自由を失いました。(右手の自由を失ってしまったが、まだ左手がある。左手でもりっぱな絵を描いてみせるぞ。)

すでに 60 歳を越えていましたが、郷里の笠間で制作意欲をいっそう燃え立たせ、左手で絵筆を使う訓練を重ね、ついに「左武山」としてよみがえったのです。

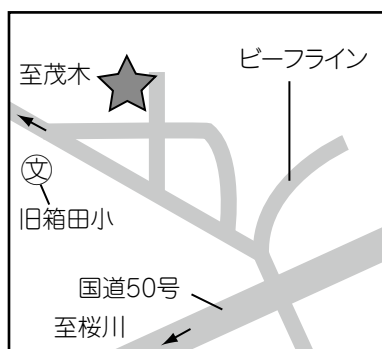
左武山になってからも、旺盛な制作活動で、仏画と花鳥画を多く残しました。その中でも、「仏画の武山」としての集大成ともいえるのが、武山が生まれ育ち、晩年を過ごした現在の笠間市箱田の屋敷内に建つ大日堂の壁の絵です。壁の絵のうち、右側壁の虚空蔵菩薩は、初めて左手で描いた仏画といわれています。

ゆがりのスポットに行ってみよう

大日堂

所在地 笠間市箱田 2 2 1 0

内容 木村武山が、昭和 10 年 (1935) に郷里に建てた総檜づくりの仏堂で、内部の壁の絵の主要部分はすべて武山が描いたものです。



(スタジオデン提供)

おもな 参考文献

『常陽藝文 63 号』(常陽藝文センター・1988)

『茨城の顔』(室伏勇・茨城新聞社・1969)